

# 文化財

## 県指定天然記念物

真福寺の大カヤ 都留市小野627 昭和34年2月9日指定

カヤは関東から九州屋久島、済州島にまで分布するものである。

この種子は、翌年の10月頃熟し、美味で十二指腸虫駆除に効くともいわれる。材質もよく土木用材、碁盤等として用いられることが多い。この真福寺のカヤは、県下一の規模をほこるもので、その内容は次のとおりである。

根廻り7.8メートル、目通り幹囲6メートル、樹高16.3メートル枝張りは東西12メートル、南北17メートルである。

樹勢は枝の一本が大風により折れているが極めて旺盛である。



## 上大幡のナシ

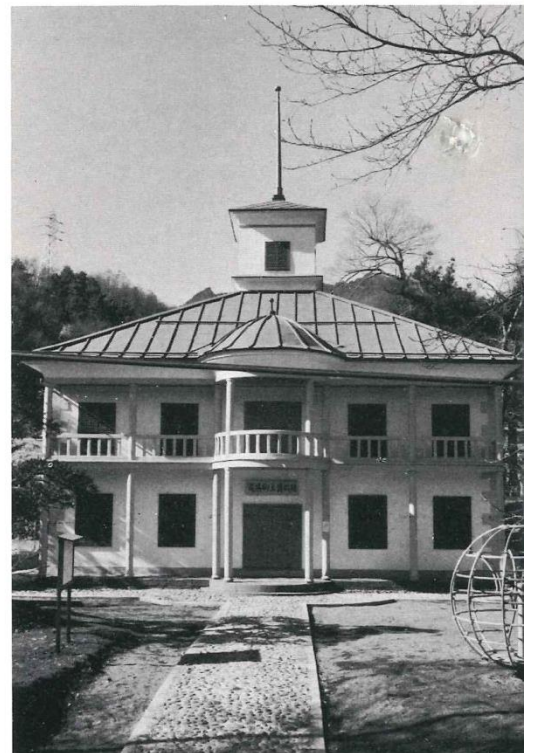
アオナシを台木にしてサビナシをつぎ木したものである。後に台木のアオナシからも芽を出し、両方ともよく生長し、一株に二種類のナシが果実をつける奇木になった。木の大きさは、根廻り2.8メートル、東幹がサビナシで幹囲1.6メートル、西幹はアオナシで幹囲1.4メートル、全体の枝張りは東西約13メートル、南北10.5メートル、樹高は約12メートルである。

花はどちらも白色であるがアオナシに比べてサビナシには花の柄に毛がある。果実はアオナシの方が早熟性で緑色の果実を9月につけるが、サビナシは錆色をしたほとんど球形の果実を10月頃つける。サビナシにはかたい石細胞組織が発達しているがそれも11月頃になると味がよくなる。

## 市指定有形文化財

### 旧尾県学校校舎（第1号）

尾県学校は、時の県令藤村柴郎の推奨によって建てられた藤村式建築様式を今に伝えた数少ない建物である。この建物は、両開きの板戸を四方に、玄関の上には丸形バルコニー、屋根には太鼓桜を、そして外装を白緑、青などのペンキもあざやかに和洋折衷のモダンな校舎で、明治11年5月5日新築、開校した。昭和16年3月31日禾生尋常高等小学校に合併し、廃止してから公民館として使用していたが、昭和45年3月30日市文化財に指定、昭和47年これを復元修理し、民俗資料館として祖先の文化遺産を収集し、公開している。







灰釉梅花大壺（第2号） 高さ42.8cm 口径13.8cm

昭和41年9月10日四日市場田代辻で、水道管敷設のため道路を掘り返し中に路面23cm下より底部を地表にむけたさかさの状態で見つかり、完全な形のまま出土した。日本六古窯の一つとして有名な常滑焼で室町時代末期にやかれたものと推定される。

その当時は、酒や水、穀物を入れるための雑器として使用されたものであるが、この壺ほどの美しさをもったものは、類例が少ない。壺の表面には、焼成中に自然についた白い灰の釉が美しくみられ肩のあたりに梅花のかま印があるような経過をへて土中に埋蔵されていたかは不明であるが、室町時代にこのような壺を所有することは容易なことではなく、有力な一族の生活が田代辻付近にあったことが想像される。

縄文式かめ（第3号） 高さ33cm 口径32.5cm

昭和32年7月法能宮原線道路改良工事中に、都留第一中学校の地続き住吉下から発見された。表土から1m50cmの下から掘り出され近くに炉の石組があった。このかめは、縄文中期に属するものと考えられ、比較的薄手のものだが、胎土、スタイル、文様の点において、市内各遺跡から発見のかめとはちがいが、類例も少なく手法の形式美をもち、口縁の装飾も簡素ながら優美で、全体にうすい楕形文とへら描きによる太い曲線の文様が特長的である。



住吉遺跡（第4号）

この遺跡は昭和46年7月に発掘されたもので、調査の結果石囲い炉をもつ円形プラン住居（直径5メートル）で南口出入口に埋甕<sup>うめがめ</sup>があった。この北隣りに第2号住居址を発見し3分の1ほど発掘したがこの住居址と類似した型式と思われる。出土品は土偶（女性の顔面）土器、石器等多数ありこの住居址外に3つの小竪穴の特殊遺構（直径1メートル貯蔵穴ともいわれる）を発見した。

この附近では他にも遺跡が確認されており縄文中期末葉の文化が栄えた地域の遺跡として学術的、文化史的な意義が大きいため昭和47年9月30日市文化財に指定し、同年12月住居を復原した。

